

論文

非国教徒アカデミーとロマン主義：非国教徒教育の歴史の概観とアナ・バーボルドへの影響

Dissenting Academies and Romanticism: A Brief Survey of the History of Dissenting Education and Its Influence on Anna Laetitia Barbauld

江口 誠¹⁾

Makoto Eguchi

■Abstract

One of the two purposes of this paper is to overview the history of dissenting education after the enforcement of the Clarendon Code (1661-1665) in England. Nearly two thousand clergymen were deprived of their teaching positions and some of them founded their own dissenting academies. There are roughly two ways to classify the education practiced by those dissenters. One method is to make a list of academies chronologically and categorize them into three groups. Another is, focusing not on the institutions but rather on the people, to divide the teachers into three groups. Joseph Priestley, who taught at Warrington Academy and then at the New College at Hackney, was one of such distinguished teachers.

The other purpose of this paper is to examine the influence of dissenting education on Anna Laetitia Barbauld, one of the English Romantic poets. Her family moved to Warrington and, her father being a teacher at the prominent academy, she received dissenting education from childhood. William Enfield, let alone Priestley, was one of her favorite teachers and she dedicated a sonnet to him, in which she advises him to lay stress not on traditional rules but rather on teachers' "candid manners" and students' "active mind." What she emphasizes here is precisely the educational philosophy developed by dissenting teachers.

Key Words: Dissenting Academies, Romanticism, Warrington Academy, Joseph Priestley, Anna Laetitia Barbauld

1. 非国教徒アカデミーとは

歴史的な経緯を含め、まず非国教徒アカデミーの成立背景について大まかな流れを確認したい。非国教徒とは、英語では主に“nonconformists”あるいは“dissenters”という表現が用いられ、両者に大きな違いはないように思われる。ただ、後者については、とりわけ1689年に制定された寛容法(Toleration Act 1689)において、カトリック教徒やユニテリアン派を除く「プロテスタントの非国教徒」(“Protestant dissenter”)と言及されて以来使用されるようになった経緯がある。

非国教徒アカデミーの成立に最も影響を与えたのは、王政復古以降の1661年から1665年にかけて非国教徒を徹底的に排除するために制定された、いわゆるクラレンドン法典(Clarendon Code 1661-1665)であると考えられる。このクラレンドン法典は4つの法律から成っている。一つ目はスコットランドとの間に結ばれた「厳粛な同盟と契約」(Solemn League and Covenant)の放棄などを含んだ1661年自治体法(Corporation Act 1661)、二つ目は国教会の祈祷書(Book of Common Prayer)の遵守等を求めた1662年礼拝統一法(Act of Uniformity 1662)、三つ目は家族

以外の5名を超える者たちとの秘密集会を禁じた1664年秘密礼拝集会法(Conventicle Act 1664)、そして四つ目は非国教徒の聖職者たちが追放された以前の職場に近寄れないようにするための1665年五マイル法(Five-Mile Act 1665)である。最も重要なのは、1662年の礼拝統一法であり、それ以前は国王への忠誠や国教会の祈祷書(Book of Common Prayer)の遵守については聖職者に限られていたのだが、それを教師にまで義務づけたという点の特徴である。これによって2,000人余の聖職者たちが追放されたと考えられている。¹⁾

そこで自身の子息らに高等教育を受けさせたい非国教徒らは、スコットランドもしくはオランダを目指すか、もしくは自ら教育機関を設立する必要があった。クラレンドン法典の四つ目の法律である五マイル法に違反した者は40ポンドの罰金が科されたのであるが、少なくとも20人の聖職者たちが勇敢に立ち向かい、非国教徒の子息らのために高等教育を提供しようと試みた。また、1690年に存在した23のアカデミーのうち半数は聖職者を目指す学生以外にも門戸を開いていたとされている。そこで当時カンタベリー大主教であったGilbert Sheldon (1598-1677, Archbishopの在

1) 近畿大学産業理工学部教養・基礎教育部門 准教授 eguchi@fuk.kindai.ac.jp

位1663-1677)は、主教らに命じて違反を確認させるほど取り締まりを強化していたようである。視点を変えれば、これらの法律や取り締まりが必要となったのは、非国教徒及び彼らの学校の影響とその重要性が高まっていったことの証左であると考えられる。しかしながら、ジェームズ二世 (James II, 1633-1701, 在位1685-1688) が追放された後に成立した1689年の寛容法制定以降は、1673年に制定された審査法 (Test Act 1673) を含めた非国教徒を排斥する法律は実際には有名無実化していたという指摘もある。²

非国教徒アカデミー研究の先駆者である Irene Parker は、非国教徒らによるアカデミーが徐々に重要になり、そして成功を納めた理由を3つ挙げている。一つは、非国教徒の聖職者や信徒たちが、それが理由で失職し、かつ信条に反することになる礼拝統一法を遵守しなければならない大学に自分たちの子息らを送らなかったためである。二つ目は、追放された聖職者である教師たちが最も効率的で最も進歩的な者たちであったためである。彼らの大多数は大学出身者であり、1662年当時にオックスフォード大学やケンブリッジ大学でフェローもしくはチューターであった。そして三つ目は、当時の人々は現在と同じように支払った額に見合うだけの良い教育を得たいと切望しており、英国国教会の信徒でさえも非国教徒の学校で教育を受けていたためである。³ 1740年からオックスフォード大学のベリオール・カレッジ (Balliol College) で学んだアダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790) は、当時の大学教育の質の低さを嘆き、「教授たちの大部分は、長年にわたって教えるふりさえも諦めてしまっている」と驚いたほどであった。⁴ 国教会の聖職志望者を除いては、当時国教会の支配下にあったこれらの大学は全く魅力的な選択肢ではなかったと考えられる。

このように、非国教徒アカデミーが益々重要な地位や役割を担うようになってきた一方で、その教師らに厳罰を処するクラレンドン法典への反発から、ある種の法的な救済が施されたと考えられている。17世紀後半から18世紀初頭に出された判決、さらには1714年と1779年の議会制定法 (Act of Parliament) によってプロテスタントの非国教徒 (“Protestant Dissenters”) に、そして遅れて1790年にはカトリック教徒に多大な教育の自由が与えられることになった。因みに Irene Parker は “Dissenting schools” と “Dissenting Academies” を峻別しており、前者は慈善団体 (“charity foundations”) で当時の学校とほぼ同等であり、後者は大学の地位を持った学校と定義している。⁵

非国教徒アカデミーの分類方法は研究者によって様々であり、ここでは代表的と思われる二つのタイプを確認したい。一つは、年代別にアカデミーを分ける方法で、例えば Irene Parker は3つのタイプに分類している。第一期は

1690年頃までの迫害を受けた時代のアカデミーとして、20～30名の生徒と一人のチューターによって成り立っていた “private” な学校が多かったと述べている。第二期は18世紀前半の、より “public” な性質を帯び、少々拡大してさらに安定したアカデミーとしている。そして第三期は、チューターらを奉仕者として任命し、寄付者らの団体によって支援を受けている組織化されたアカデミーである。⁶ この時期のアカデミーでは、詰め込み教育ではなく、考えることを重要視して自らの言葉で考えを述べさせるような、ある意味自由な発想を養成する教育を目指したことが特徴的だと思われる。因みに H. McLachlan はそのような分類方法を否定し、非国教徒の聖職者以外の職業を目指す学生を受け入れていたかどうかという点のみに注目している。⁷

一方、Ashley Smith はアカデミーではなく教師に焦点を当て、彼らを3つのタイプに分類している。まず一つ目のタイプは、オックスフォード大学もしくはケンブリッジ大学での経験を持っており、それ故、学生に対して古来の大学でも教師が楽しんだ内容と同等、さらには改善を加えた教育内容を与えることが目的のチューターである。二つ目のタイプは、両大学に精通していたわけではないが、それでも両大学の伝統を継続しようと試みたチューターたち。三つ目のタイプは、伝統的な従来のアイデアを適宜取り入れつつも、理想的なカリキュラムを構築しようと試みたチューターである。⁸

ただ、非国教徒といえども、18世紀後半には数多くの宗派が存在していたことも忘れてはならない。⁹ 例えば最も有名な非国教徒アカデミーの一つであるウォリントン・アカデミー (Warrington Academy, 1757-1786) には多くの長老派のユニテリアン教師が在籍していたと言われている。¹⁰ 因みに、同アカデミーが当時どれほどの名声を博していたのかという点について、McLachlan が以下のように説明している。

Warrington Academy, which earned for the town the pride title of “The Athens of the North,” is one of which nonconformists may well be proud, for in the course of less than thirty years it made a mark on the intellectual life of the county comparable only to that of a great university like Oxford or Cambridge at a later period.¹¹

大陸の通称ソツツイーニ派 (Socinians) やアリウス派 (Arians)、そしてイギリスのユニテリアン (Unitarians)、それも知識人らがその教義に同調した理由に関して、「新約聖書の中の記述を科学的に、そして合理的に分析する

と、ソツツイーニ派の教義の特徴である反三位一体説は、聖書に照らせばむしろ当然のことと理解したからであろう」と船木氏は述べている。さらに同氏は、英国ユニテリアニズムは「イギリス経験論の伝統上に出現したものであり、「ロックの経験論の精緻化がキリスト教の合理性を主張するプリーストリの世俗的なユニテリアニズムに継承されたのではないか」とも推論している事も付け加えておきたい。¹² 尚、ウォリントン・アカデミーの名声を高めた立役者の一人であるジョーゼフ・プリーストリ (Joseph Priestley, 1733-1804) については後述する。

2. 独自のカリキュラムを構築した教師とその教育

以降は、Ashley Smithによる三つ目の分類、つまり独自のカリキュラムを構築しようとした教師個人の資質とその人間関係及び教育内容に注目したい。独自のカリキュラムを築き上げた教師らは、さらに5つに分類されており、まずは賛美歌作者で知られている Philip Doddridge (1702-1751) と彼の後継者たちが挙げられる。因みに彼の影響は大きかったものの、思想的な極端な偏りはなかったと考えられる。他にもユニテリアン派のアカデミー、正統派のアカデミー、バプティスト系のアカデミー、そしてメソジスト・リバイバル系のアカデミーが挙げられている。

中でもユニテリアン派のアカデミーの教師らは、最もラディカルな精神の自由 (“the most radical freedom of spirit”) を促したと考えられていることが特徴であり、ここではその中でも最も代表的な教鞭を取ったジョーゼフ・プリーストリに注目したい。彼は1761年から1767年までウォリントン・アカデミーで教師を務め、その後、牧師職や政治家の司書、そして大陸旅行を経験した。しかしながら、当時は大変な危険人物として見なされていたこともあり、1791年に勃発したいわゆる「バーミンガム暴動」(The Priestley Riots / Birmingham Riots of 1791) によって自宅、実験室、さらには教会など関係する多くの建物が焼き討ちにあった。その後ロンドンに移り、1791年から1794年までハックニー・カレッジ (The New College at Hackney) で再び教師を務め、同カレッジでは、リチャード・プライス (Richard Price, 1723-1791) も教鞭を執っており、ロマン派への影響という観点から見れば、例えばウィリアム・ハズリット (William Hazlitt, 1778-1830) が彼らの教えを受けている。しかしながら、「ロンドン革命協会」(London Revolution Society) との密接な繋がりもあり、政府や穏健な非国教徒からも危険思想の温床と見なされるようになり、1794年にはアメリカに旅立ち、彼は二度と祖国に戻ることはなかった。プリーストリの生涯について、安川氏は、「彼の歩みは、十八世紀イギリスの合理的ディセンターが

たどった数奇な運命を象徴している。と同時に、それはまた彼の人生とともに発展していった『非国教派アカデミー』の歴史そのものであった。」と述べている。¹³

さて、プリーストリは酸素の発見など化学の分野で有名ではあるが、両校に於いて独創的な考えに基づいた教育を実践したことは注目に値する。彼自身は親族が望んでいた学校の入学する際に求められるカルヴァン主義信条への署名に強く反発したため、19歳の時に前出のDoddridgeの影響が強く残るダヴェントリー・アカデミー (Daventry Academy) に入学した。その学校では、「自由と必然の問題、神学上のあらゆる教義が、正統派と非正統派に分かれて、全く自由な形式で討論されていた」ようである。¹⁴ さらにそこで彼はコールリッジを含め、多くのロマン派詩人にも影響を与えたと思われる、デイヴィッド・ハートリー (David Hartley, 1705-1757) の『人間論』(*Observations on Man*, 1749) に強い影響を受け、『ハートリーの人間精神の理論』(*Hartley's Theory of the Human Mind, on the Principle of the Association of Ideas*, 1775) というタイトルでその内容を自ら編集して縮小版を出版したほどであった。連合 (連想) 心理学 (association psychology) の創始者とも言われているこのハートリーの思想を多く受け入れたプリーストリは、「経験」を全ての精神機能の基盤と位置づけた。そしてそれは、トマス・ホブズ (Thomas Hobbes, 1588-1679) やジョン・ロック (John Locke, 1632-1704) らに代表されるイギリス経験論哲学者に繋がる思想だと考えられる。さらに、神の恩寵によってのみ人間が完全化されるというアウグスティヌス的なキリスト教思想とは異なり、5世紀以降の正統のキリスト教からは異端とみなされていた、「自らの自由意志の行使によって人間が完全化される」というペラギウスの考え方が教育において実践されたと考えることも可能ではないだろうか。

プリーストリは、ウォリントン・アカデミー着任後、3人のアリュス主義のチューターによって非実用的な教育が実践されていた同アカデミーの教育改革に着手する。経験を重要視し、例えば自然科学を教える際に実験の役割を強調し、透視図の練習では理論に固執せず、「予期された経験」と表して歴史の学習を促し、ラテン語やフランス語の類似点からではなく、現代の英語の例から英文法を学ぶことを推奨する。彼の教育への最も顕著な貢献は、カリキュラムの中心科目として歴史を導入して体系化したことであり、カリキュラム改革の必要性を説いた。以下は、その一例である。

It seems to be a defect in our present system of public education, that a proper course of studies is not provided for gentlemen who are designed to

fill the principal stations of active life, distinct from those which are adapted to the *learned professions*. We have hardly any medium between an education for the counting-house, consisting of writing, arithmetic, and merchants' accounts, and a method of institution in the abstract sciences : so that we have nothing liberal, that is worth the attention of gentlemen, whose views neither of these two opposite plans may suit.¹⁵

因みにここで言う“learned professions”とは神学、医学そして法学のことであり、これらを志す者たち以外にとって適切な学問体系が提供されていないことをプリーストリは嘆いている。それ故、彼は歴史的な知識を得ることが真理に近づくことであるという信念のもと、歴史を中心に据え、政治、法律、経済、数学、地理やフランス語といった近代的なカリキュラムを構築するのである。

3. アナ・レティシア・バーボルド

最後に、上述の非国教徒アカデミー及びその教師らがロマン主義時代の詩人たちに与えた影響の一例として、アナ・レティシア・バーボルド (Anna Laetitia Barbauld, 1743-1825) を取り上げてみたい。彼女の母方の祖父 John Jennings (c.1687-1723) は、王政復古以降に追放された同名の聖職者 (1634-1701) の息子あり、前出の Philip Doddridge が最も影響を受けた教師でもある。John Jennings は、Ashley Smith の分類によれば、大学教育を受けてはいないがそれと同様の教育を実践しようとしていたチューターの一人であり、さらにイングランド北部でラスメル・アカデミー (Rathmell Academy) を創設したケンブリッジ出身の Richard Frankland (1630-98) の影響を強く受けた教師に分類されている。¹⁶ アナ・バーボルドの父方の祖父 John Aikin (1644-1756) は、スコットランドにあるカーブリのリンネル商人であった。つまり、彼女は祖先にプロテスタント非国教徒の2つの源流、即ち王政復古で追放されたイングランドの非国教徒、さらに16世紀の改革者ジョン・ノックス (John Knox, c.1514-1572) に繋がるスコットランド長老派教会という2つの大きな流れを象徴的に受け継ぐ家に生まれたことになる。因みにレティシアの詩集を編集し、伝記を執筆した William McCarthy によれば、“Presbyterian” という表現は、長らく国教会信者によって好んで使われた侮蔑語でもあるという。非国教徒全般は道徳的な卓越性を重んじる「フリ」をしており、また別の侮蔑語でもある“rigid”つまり「柔軟性に欠け」、冗談が通じず、非社会的な分離主義者というニュアンスで

使われ、そして恐らく、全くの中産階級であり、貿易とお金と産業に取り付かれているという意味も表していたのではないかということである。¹⁷ ロバート・サウジー (Robert Southey, 1744-1843) もこの語を頻繁に、かつ侮蔑的に使用していたようであり、さらにメアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759-1797) は自著『女性の権利の擁護』(*Vindication of the Rights of Women*, 1792) の中で、自戒の念を込めつつ、抑圧されてきた非国教徒と女性にある種の共通点を見出している。¹⁸

次に、レティシアが受けた教育に注目してみたい。ウォリントン・アカデミーの教師の一人であった父 John Aikin, D.D. (1713-1780) 及び同アカデミー教育方法に関して、William Turner は以下のように述べている。

But the advantages which the students derived from their tutor, were not confined to the lecture room: he had frequent small parties to drink tea with him, when he was accustomed quite to unbend, and enter with them into the most free familiar conversation. Then was the time when difficulties were most freely communicated, and with the most unwearied patience, listened to and obviated; his opinion of books, or of courses of reading on particular subjects, was asked and frankly given: sometimes (but this was generally when younger students were of the party) he took the lead in the conversation, and himself pointed out books which might be read with advantage: and frequently he enlivened the social hour with anecdotes of his own youthful years; of the difficulties which had occurred in the course of his own studies, and how he had surmounted, or suffered by them; of the varieties of character among his fellow students, and (by way, sometimes of encouragement, sometimes of warning) the manner in which they had turned out in the subsequent periods of life.¹⁹

お茶の時間に行われた「自由で気楽な雑談」(“free familiar conversation”) という表現に彼の教育理念が象徴的に表れている。また、John Aikin は講義後も議論の時間を設け、とにかく常に学生に理解してもらうことに執心し、「諸君、私は君たちの満足のいくように教科内容を説明できていたでしょうか。」(“Gentlemen, have I explained the subject to you satisfaction?”) と講義の最後に尋ねるほどであった。²⁰ また、アナ・バーボルドは、長年エイキン家と親しく、プリーストリの次に彼女のお気に入りであった同アカ

デミーの文芸 (*bells lettres*) の教師でもあり、学生の素行を管理する役割も担っていたWilliam Enfield (1741-1797) への助言とも言える詩を書いている。

47. {William Enfield}

Joy to the friendly heart! May Peace dwell here
 And her soft train that shed the bliss sincere!
 O well beloved! whose voice, whose looks are found
 Powerful to spread a sudden gladness round;
 Cease, cease to travel countless volumes o'er 5
 Thro the dry page of dark scholastic lore;
 From native springs thy easy virtues flow,
 What more can sages teach, or books bestow?
 Cease, cease the task by precept to inform
 The glowing breast with youthful ardour warm, 10
 Thy candid manners and thy active mind
 With more prevailing force the will shall bind,
 Goodness by happy sympathy impart,
 And with thy own sweet morals charm the heart.²¹

古来の教育を批判しつつ、さらにいわゆる宗教的・道徳的な「教え・規範」(“precept”)ではなく、同アカデミーにおける特徴の一つとも言える「率直な方法」(“candid manner”)や「活発な精神」(“active mind”)といった心の内からの学生の指導を勧めていることが窺える。

4. 最後に

以上、17世紀第4四半世紀の非国教徒アカデミーの成立とその発展、進歩的な教育方法の考案とその継承が18世紀末から19世紀初頭の人々に与えた影響について概観した。非国教徒アカデミーの教育は、やがては入学や卒業に関して宗教審査を実施しないロンドン大学の創設へと繋がる。しかしながら、その一方で、非国教徒アカデミーの功績を過大評価すべきではなく、宗教的な分離主義や政治的な教唆・暴動を蔓延させる原因となった場所であったとの批判もあり、さらなる資料の研究が必要だという指摘もある。²²

非国教徒アカデミーの教育がロマン主義時代の詩人たちに与えた影響という観点からすれば、結果的にそれが成功裏に終わったかどうかはまた別の問題であるとして、アナ・バーボルドのような女性へ詩人への扉を開いたと考えることが出来るのではないだろうか。今後は、同様に幼少期に非国教徒アカデミーで教育を受けたジョン・キーツ(John Keats, 1795-1821)なども含め、非国教徒アカデミーの教育がロマン派詩人に与えた影響についてさらなる調査と研究を進める必要がある。

[本論は、2019年10月19日に大妻女子大学で開催されたイギリス・ロマン派学会第45回全国大会シンポジウム「イギリス・ロマン派と教育」での発表内容に加筆修正を施したものである。]

注

- 1 Michael R. Watts, *The Dissenters: From the Reformation to the French Revolution*. (Oxford: Oxford UP, 1986) 219.
- 2 William McCarthy, *Anna Letitia Barbauld: Voice of the Enlightenment*. (Baltimore: Johns Hopkins UP, 2015) 9.
- 3 Irene Parker, *Dissenting Academies in England: Their Rise and Progress and their Place among the Educational Systems of the Country*. (Cambridge: Cambridge UP, 1914) .
- 4 Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of Wealth of Nations*. (London: T. Nelson and Sons, 1852) 319.
- 5 Parker 50.
- 6 Parker 58, 75-76, 103-104.
- 7 H. McLachlan, *English Education Under the Test Acts: Being the History of the Nonconformist Academies 1662-1820*. (Manchester: Manchester UP, 1931).
- 8 Ashley J. W. Smith, *The Birth of Modern Education: The Contribution of the Dissenting Academies 1660-1800*. (London: Independent Press LTD., 1954).
- 9 Michael R. Watts, *The Dissenters: From the Reformation to the French Revolution*. (Oxford: Oxford UP, 1986) 6.
- 10 ユニテリアニズムについては、以下に詳しい：船木恵子, 「イングリッシュ・ユニテリアニズムとヴィクトリア時代思想」, 『ヴィクトリアの思想とJ. S. ミル：文芸・宗教・倫理・経済』, (東京：三和書籍, 2013年) 49-71.
- 11 McLachlan 209.
- 12 船木 51, 55.
- 13 安川哲夫, 「ジョゼフ・ブリーストリー教育による進歩の思想の確立者—」, 『現代に生きる教育思想2—イギリス—』, 白石晃一・三笠乙彦編. (東京：ぎょうせい, 1982年) 50.
- 14 安川 52.
- 15 Joseph Priestley, *Essay on a Course of Liberal Education for Civil and Active Life*. (London: Pearson and Rollason, 1765) xiii.
- 16 Smith 111-121.
- 17 McCarthy 11.
- 18 Mary Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Men/ a Vindication of the Rights of Woman/ a Historical and Moral View of the French Revolution*. (Oxford: Oxford UP, 2008) 282.
- 19 William Turner, “Historical Account of the Warrington Academy,” *Monthly Repository* 8 (1813): 169.
- 20 Parker 111.
- 21 Anna Letitia Barbauld, *The Poems of Anna Letitia Barbauld*. Eds. William McCarthy and Elizabeth Kraft. (Athens and London: The U of Georgia P, 1994).
- 22 Mark Burden, “Dissent and Educatio,” *The Oxford history of Protestant Dissenting Traditions Volume II*. Ed. Andrew C. Thompson. (Oxford: Oxford UP, 2018) 408-9.